

Purpose

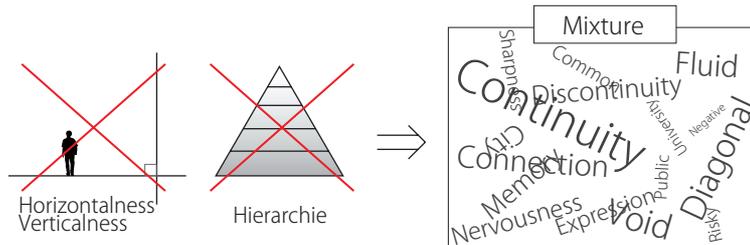
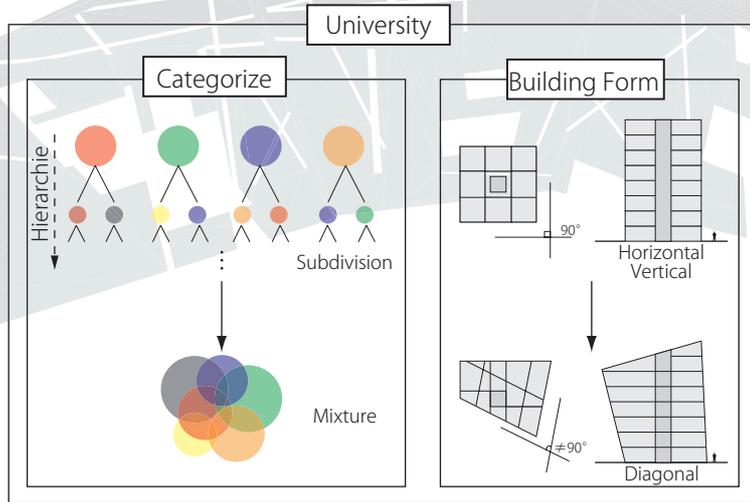
現在大学には文系・理系という大きなカテゴリーがあり、そこから細分化された多数の学部・学科が存在する。しかし知識の本質を考えると、局所的な教育が豊かな人材の育成に適しているとは思えない。

では「知識」とは何か。
それは無限遠に広がる新たな地平のことである。大学の専門特化型、あるいは一極集中型の教育方針は個人の広い視野を狭くし、本来そこにあるはずの分野間の多次元的な相互連関の姿は無く、予定調和を超えた新天地は身を潜めてしまっている。

また「学び」とは何か。
それは身体を境界とする内外の濃密な対話である。新たな情報を内に取り込み自らの知とする時、そこでは自己との対話が発生している。それは理性と感情の混濁状態であり、時に不安や緊張というネガティブな要素が我々の自律性を超越した発見を与えてくれる。現状のありふれた没個性的な空間ではその自律性を超越することはできず、感覚は鈍く、重くなるばかりである。

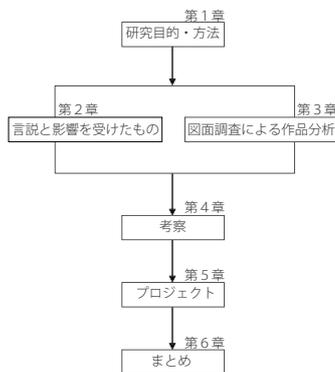
これらの命題を解くため、従来の垂直性・水平性にこだわらずに建築空間を提案し続けている建築家の一人である Daniel Libeskind に注目し、斜線や鋭角的なデザインを随所に取り込むその特徴的な建築形態の設計手法を明らかにする。

そしてそこで得られた手法を用いて、分野の融解と重合を体現する大学空間を提案することが本研究の目的である。



Flow

文献調査を基本とし、対象とする作品は Daniel Libeskind の言説が掲載されている建築雑誌および作品集より選出する。まず文献資料に基づく分析として、D・L 自身によるテキスト、本人に対するインタビューから読み取れる設計手法、思想、また影響を受けた事物などを拾い上げ項目別に分類、キーワード化し分析する。次に建築雑誌および作品集に掲載されている作品を対象に、考え方や思想をどのように実際の建築空間として具現化しているか、という点に注目して分析・考察をする。そして Daniel Libeskind の設計手法を取り込みながら具体的な大学空間の提案をする。

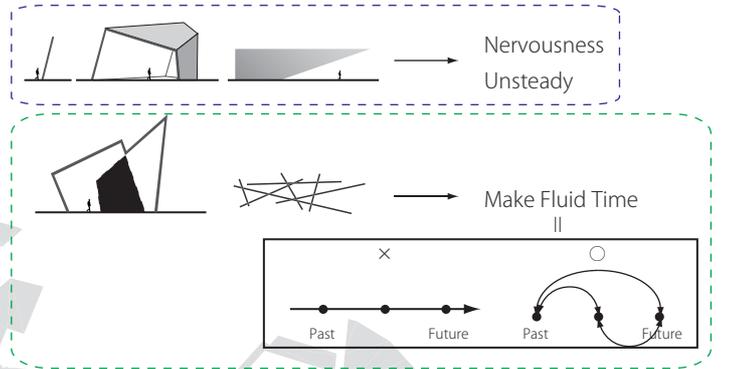
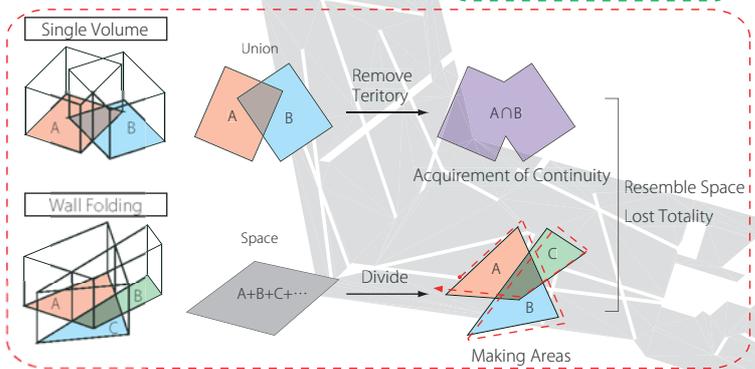
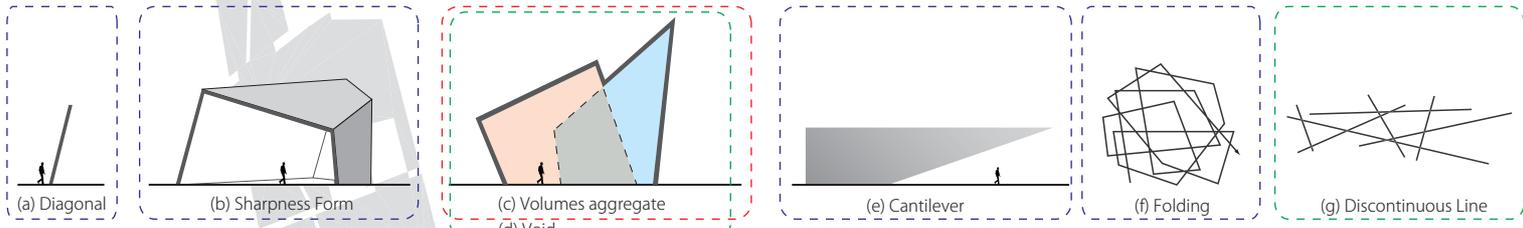


| 番号 | 作品名 | 所在地 | 竣工年 |
|----|-----------------------|---------------|------|
| 1 | フェリックス・ヌスバウム美術館 | ドイツ、オスナブリック | 1998 |
| 2 | ベルリン・ユダヤ博物館 | ドイツ、ベルリン | 1999 |
| 3 | 北将臣戦争博物館 | イギリス、マンチェスター | 2001 |
| 4 | スタジオ・ワイル | スペイン、マヨルカ島 | 2003 |
| 5 | デンマーク・ユダヤ博物館 | デンマーク、コペンハーゲン | 2003 |
| 6 | ロンドン・イギリス・ユダヤ博物館 | イギリス、ロンドン | 2004 |
| 7 | タモリア・エル・チエリ・ロザリオ美術館 | イタリア、パドヴァ | 2005 |
| 8 | デンヴァー美術館増築 | コロラド州、デンヴァー | 2006 |
| 9 | 五立オンタリオ美術館増築 | オンタリオ州、トロント | 2007 |
| 10 | ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館増築 | イギリス、ロンドン | 中止 |
| 11 | オラニエンブルク設計競技 | ドイツ、オラニエンブルク | コンペ |
| 12 | アレクサンダー広場設計競技 | ドイツ、ベルリン | コンペ |

研究対象

Design Technique of Daniel Libeskind

分析から Daniel Libeskind の作品に (a) ~ (g) の 7 つの形態操作を見い出せた。Daniel Libeskind は複数のヴォリュームの組み合わせによる全体の構築を基本としており、それは実際に複数のヴォリュームを組み合わせる以外に壁面の回転操作によって複数のヴォリュームを噛み合わせているように見える事例があった。



単位ヴォリュームの集合は個々の完結した領域を融解させて連続性を獲得し、壁の回転による集合は流動的な空間を分割する。そのような複雑な多面体の集合による総体は場所の類似性を生み、空間全体が連続的につながる状態を作り出している。それは同時に自己の所在という空間把握を曖昧にすることであり、「部分と全体」という相対的な位置関係 (全体性、場所性) を欠落させている。

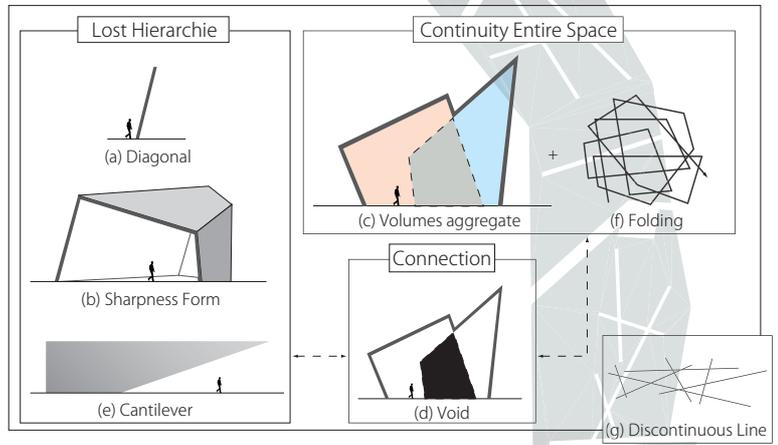
また鋭角的造形、斜め、キャンチレバーといった形態操作が、過去の忘れてはならないネガティブな記憶との対峙、不安定さ、緊張感を誘発していると考えられ、さらにヴォイドやスラッシュのような開口部によって「一方向的な線型の時間」という固定的な時間概念を、流動的で特定され得ない時間へと解放することが分かった。

Concept

Daniel Libeskind の建築空間の特徴である〈空間の類似性〉〈不安定さ、緊張感〉を用いて具体的な大学空間へと展開するために、分析から導いた (a) ~ (g) の 7 つの形態操作を利用する。

(a) 斜め、(b) 鋭角的造形、(e) キャンチレバーは不安・緊張を促し場所ごとのヒエラルキーを無くす要素とし、それらを連続的な一つの全体とするために (c) ヴォリュームの集合を用い、(d) ヴォイドで空間のつながり方をコントロールする。(c) は (f) 回転に準ずることで連続的に繋がりが合っている空間の中をゆるやかに分節することを可能にし、本計画の主旨である分野の重合に有効性を見出す。

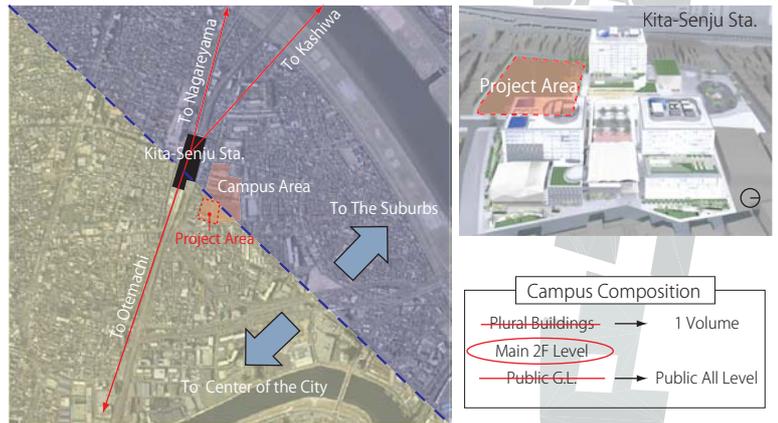
水平性・垂直性からの解放とヒエラルキーの消失によって異なる領域が多層的に、また連続と断絶が錯綜し渾然一体となる時に現出する一つの共同体としての空間に、知と学びの在り方を再考する機会があると考える。



Campus

移転によりキャンパスの性格が大きく変化するであろう東京電機大学千住キャンパス計画地の I 街区を敷地として選定した。そこに新たに居住系の施設を含む建物を増築する。

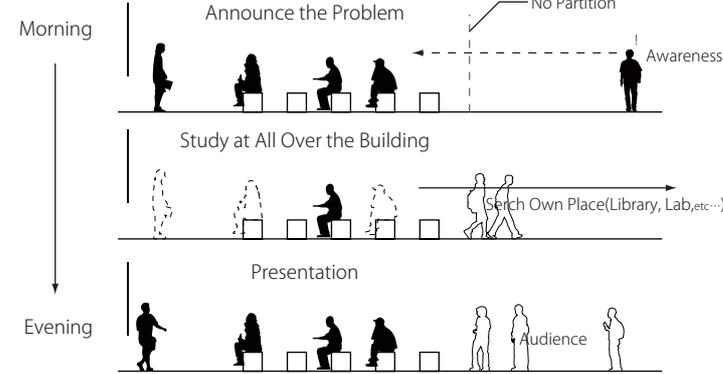
最寄の北千住駅は 5 つの沿線のターミナル駅として多方面から乗り入れがあり、豊かなスペースのなかの教育・研究環境というかつての郊外型キャンパスの論理を凌駕し、学生街としての発展も見込まれる。さらに東京都心と柏の葉、流山などの郊外の中間領域にあることで、都市居住あるいは都心へのアクセスが容易な活動拠点として多様な人種の合流点となる。つまり近未来において人の集まる要素をもった高密度・集約型のキャンパスとしての潜在性が秘められている。これらを踏まえて、異なる分野の併置によるボーダーレスで自由な往来とアイデアの交換が行われる新しい大学を提案する。



Academic Program & Site

教育システムとして PBL (Problem Based Learning) を取り入れ、特定の場所に縛られることなく自由に移動し、好きなところで研究・調査・制作をするという各々の自発性に委ねる形の教育方針を提案する。空間は学生の知的好奇心と多くの発見を享受する場所で満ちる。

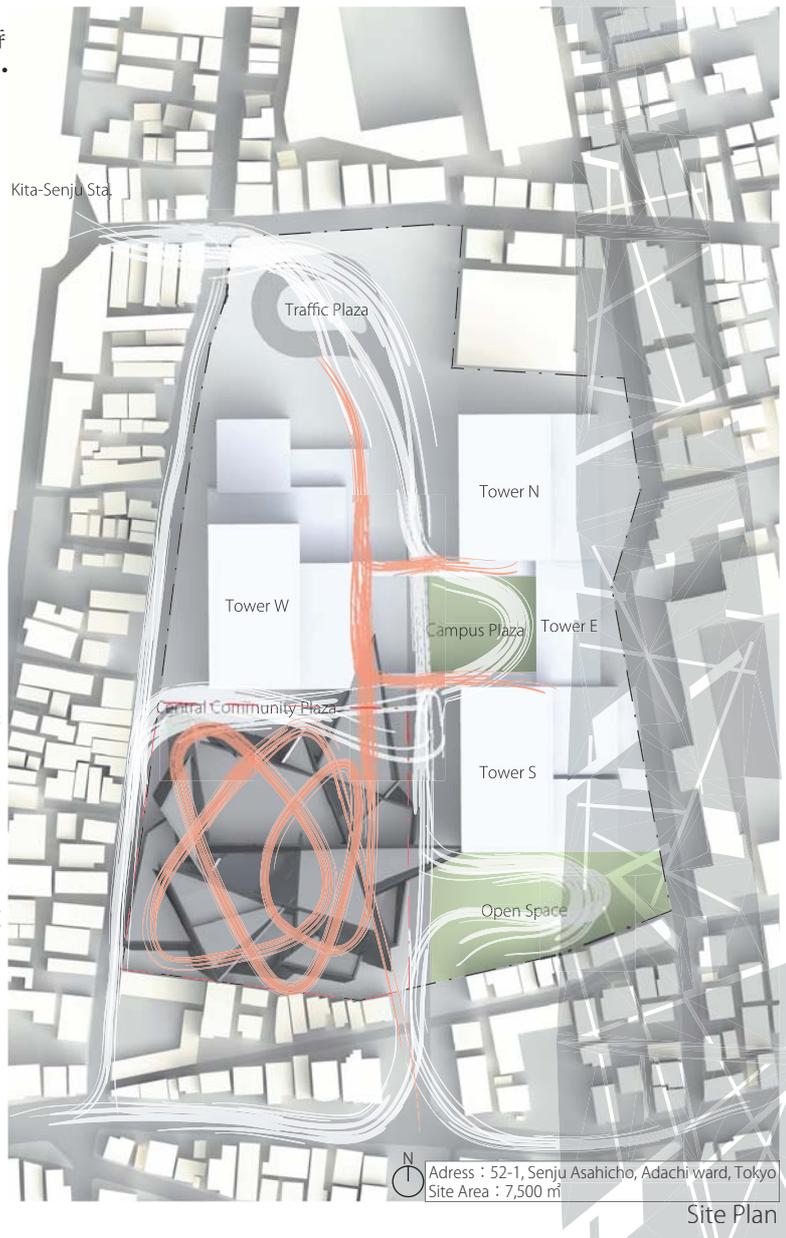
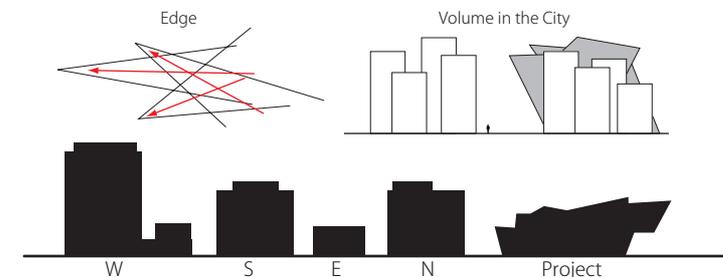
さらに海外を含む遠方からの講師・留学生のための居住空間を計画する。異なる学問が互いに溶け出し境界が曖昧になっていくことに加え、海外からの人材により発見に満ちた大学キャンパスになるように計画する。



Form & Volume

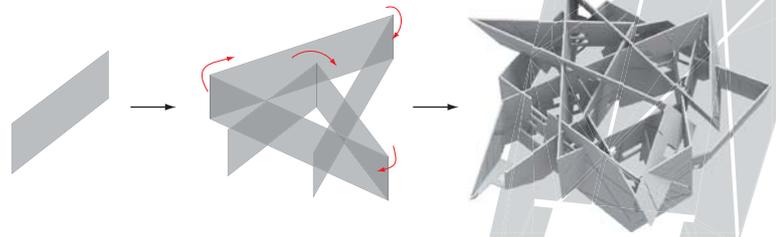
建物にはエッジの立つ鋭角的な形態を採用する。鋭角さは適度な不安や緊張を訪れる人に与えるとともに、先端に対するパースペクティブを感じさせ、方向性が生まれる。それぞれに違う方向性が錯綜することで行為や機能の重合を促し、多視点な建築全体に一体性をもたせる。

また建築ヴォリュームは周囲の建物に隠されて一部のみが表出する。全体像が明らかにならず周辺の垂直性・水平性をもった建物の隙間から斜めの角度をもった形態が垣間見えることで、その鋭角性をより一層強調するとともに街の新たなランドマークとなる。



Folding Wall Diagram

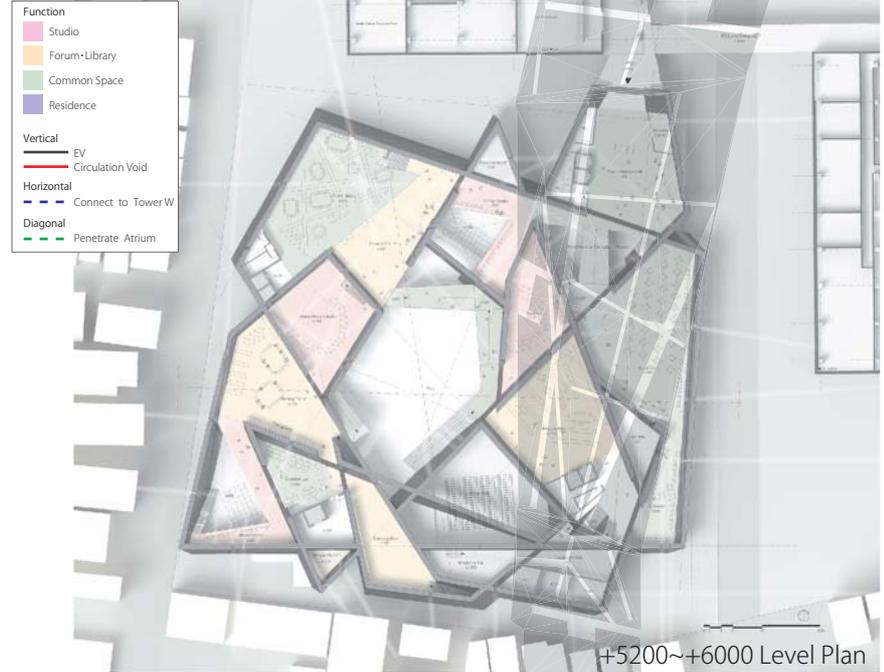
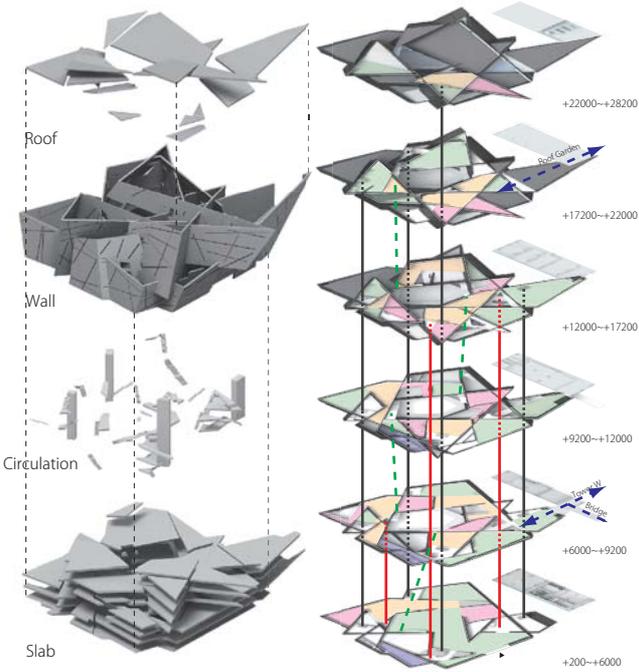
建築を構成する壁は敷地内を折れ曲がりながら一続きにループし、建築全体と連続的なくつもの空間をつくり出す。壁は斜めに建ち上がり、異なる機能は壁によって貫通されるように配置され、場所ごとの空間性を生む。そして壁の現出によって隔てられた異なる機能をもつ空間同士は、切り刻まれるように設けられた無数の線の開口部によって接続と断絶を繰り返す。



About Plan

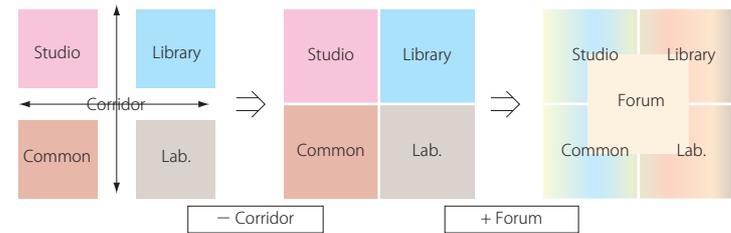
異なる分野の重合、それらの体感と発見、知的探究心を動かす場所。それらは自発的に見つける場合と偶然に見つかる場合がある。空間はスタジオ、フォーラム、コモンスペースの3種類が巡るように構成され、それらは幾多のヴォイド、アトリウム、フォーラムを介しながら連続する。空間に満たされたいくつもの機能を巡りながら、自分が欲する知識・情報、あるいは偶然的なインスピレーションをインプットできるスペースがいつも近くにあり、学生は「知」の空間を常時巡ることとなる。

そしてダイナミックな経路を通して移動する途中でそれぞれの場の活動風景が見え、いつでもどこでも議論が始まるボーダレスな空間で思考をアウトプットする。全く違ったパラダイムや考え方をもちた人々を併置することで、予定調和を超えた議論がそこそこで起こり、建築内は自由な往来とアイデアの交換がスタンダードに行われる場で溢れていき、様々な分野や領域を超えて一つの大きな共同体として建ち上がる。

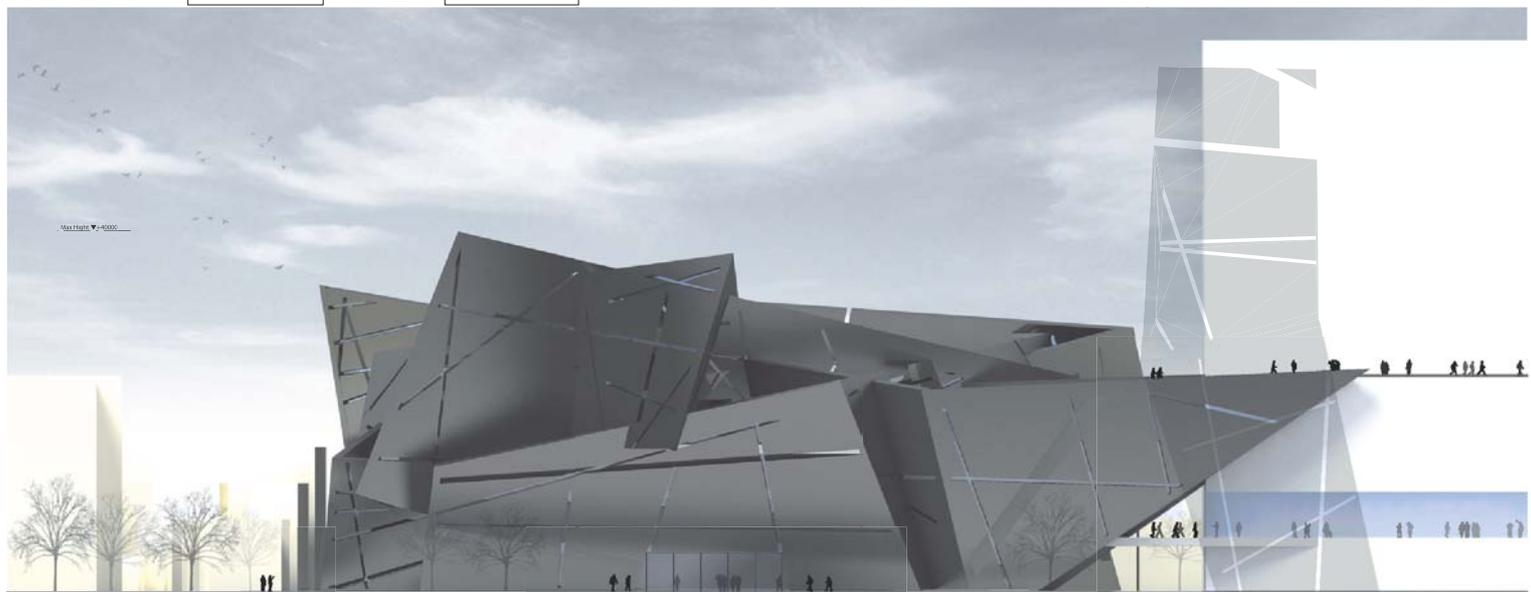
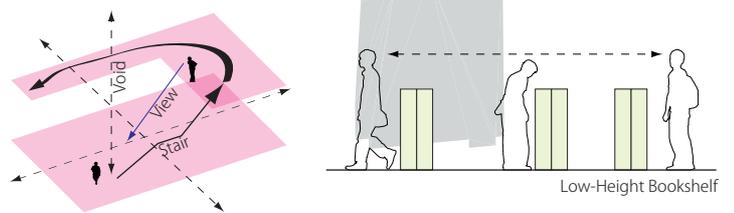


Diagram

異なる機能群はフォーラムを介してつながり合う。フォーラムには大きなテーブルと書架があり、情報共有や議論の発生に対応する。



スタジオはヴォイドを含んだ2層構成になっており、空間を平面的だけでなく断面的にも展開することで、隣り合う機能と立体的に連続する。



East Elevation

